

春日部福音自由教会 2020年8月16日 11:00 中央会堂礼拝(同時配信)

聖書 新約聖書 マルコの福音書 8章 31節~33節

説教「多くの苦しみを通る」 小野信一牧師

## I. 序

おはようございます。2020年の8月16日の主の日の礼拝を共にささげております。同時配信の方も繋がってますでしょうか。今何人ぐらい視聴しているか分かりますか？13人。はいありがとうございます。いろいろとうまくいかない時もありますけど、何とか繋がっているようです。感謝いたします。

先週は敗戦記念礼拝をささげました。そして昨日は8月15日敗戦を覚える日であり、また新たな思いで平和を祈る日でもありました。今日はこの主の日の礼拝でマルコの8章31節から33節が朗読されました。イエス様が苦難の予告をされた最初のみ言葉です。いま新型コロナウイルスで世界中、日本中、社会全体、そして教会もまた色々な形で悩んでいます。苦しんでいます。また迷っています。イエス様の苦しみの予告の言葉に聞き、また苦しみの意味に心を向けましょう。

## II. 初めの祈り

ともに祈りをささげます。

天にいらっしゃる私たちの父なる神様。あなたの前に出てあなたを礼拝します。あなたこそ私たちの神、私たちの造り主です。あなたこそ私たちの歩みを見守り導いてくださるお方です。主イエス様のみ言葉を聞かせ、主イエス様の御姿を見させ、その足跡に歩ませてくださいますように。開かれたみ言葉をもってお語りください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。

## III. 苦難の予告

イエス様は『人の子は多くの苦しみを受ける』『受けなければならない』と話をされ、弟子たちに教え始められました。これはイエスキリストによる最初の苦難の予告なのです。これからマルコの福音書で、三度その苦難の予告が繰り返されます。今日の箇所は、「イエスとは誰か」それは「キリストである」、そして「あなたこそキリストです」ということが明らかになったこの時点で、イエス様が「キリストは何をするのか」そして「キリストであるとはどういうことなのか」「キリストであるということの意味」を明らかにし始めたところです。キリストは言われました。『人の子は、(すなわちご自分のことです)多くの苦しみを受けなければならない。長老、祭司長、律

法学者たちに捨てられなければならない。殺されなければならない。そして三日後によみがえらなければならない』と教え始めたのです。イエス様はこれから多くの苦しみを通して、それから命とよみがえりに至る。これから行く道を予告し始めました。弟子たちや人々は、これからのイエス様、この方こそメシアなのだとわかったイエス様の、これからの道に輝かしい未来、力強い勝利を期待しているかもしれませんが。でもイエス様が目指している栄光は違う種類の栄光でした。それは《上げられる》ことでしたけれども、王として高い王座に上げられるということではなくて、イエス様が上げられるのは“木の上に上げられる”ことでした。呪いの木でした。裁かれて死ぬことでした。捨てられて死んでいくことでした。

「あなたはキリストです」と告白した弟子たちに、イエス様はそのことを、ここで教え始められました。でも弟子たちはその意味をまだわかっていません。誰も知りません。ただ父と御子だけが知っておられる。そしてその道を進んで行こうとしておられます。その道にイエス様は「ついて来なさい」と言ってくださいます。これは今日の箇所より後のところ 34 節のところに出てくる言葉です。この段落、31 節から 38 節までは一つの段落になっていますが、そこを二つに分けて今日は 33 節までとしました。34 節のところ「わたしのあとからついて来なさい」と、イエス様が言っておられるみ言葉があります。弟子たちは半分しか分かっていません。私たちも半分も分かっていない。でもそういう弟子たちや私たちを、イエス様は呼んで招いてくださいます。イエス様はこれから起こる苦しみのことをはっきりと話されました。大胆にあからさまに堂々と「これからこのようになっていくのだ」と話されたのです。

#### IV. 人の思いと神の思い

しかしシモンペテロはそれをはっきりと拒んだ、と言いますか「そんな苦しみなんかあってはなりません、そんなもの欲しくありません、いりません」とはっきり拒んだのです。ペテロはイエス様を「脇にお連れしていさめ始めた」と書いてありますが、この“いさめ始めた”っていうところはですね、直訳しますと【叱る】という言葉なのです。33 節にイエス様がペテロを叱りますけど、そのペテロを【叱って】というのと同じ言葉です。ペテロの方がイエス様を叱り始めてしまったわけです。ペテロは「あなたはキリストです」という大事な信仰告白を父から与えられました。でもまだ大事なことが見えていません。イエス様が言われたこと「多くの苦しみを通るんだ、捨てられ殺されるのだ」そう言ったイエス様にペテロは、腕を掴んだのでしょうか、横の方に引っ張って行ってそして言いました。「そんなことはありません」「そんなことはない。間違っている。そんなことはあなたは言うてはいけない」とペ

テロはイエス様をいさめるのです。あるいは叱るのです。そこにはペテロなりの思いがあったでしょう。ペテロなりの期待があったでしょう。ペテロだけではなくて、ペテロや 12 弟子全員、そして他の人達にも期待があったのです。それはどんなものだったのでしょうか。《メシアが来ると苦しみをなくしてくれるのではないか》そのような思いがあった。《なぜキリストなのに メシアなのに苦しみに遭わなければならないのか。苦痛なしだったら良いのに。なぜそうじゃないことをイエス様は言うのだろう。なぜだろう》という思いだったのではないかと思います。

これはイエス様がこのマルコの福音書の最初のところでサタンの試みを受けましたけれど、そことも通じていることだと思います。マルコの福音書の 1 章の 13 節のところに、イエス様が 40 日間荒野でサタンの試みを受けられたということが書いてあります。マルコの福音書には、どんな試みだったのか、どのようにしてイエス様はその試みを退けたのかということは書いていませんけれども、ほかの福音書に詳しく書いてあります。そこではこんなことがあると思うのですね。イエス様はサタンからそそのかされたわけです。「このように考えてもいいのじゃないですか」。つまり「神に聖別されたものは苦難と拒絶と死を避けることができるのだ、神の支配は苦痛のない力、屈辱のない栄光を意味するのだ、そのように考えてもいいのじゃないですか」とそそのかされたということなのです。そしてイエス様がそそのかされたように、私達もそのように考えるようそそのかされます。《神様に選ばれた人は苦しみに遭うことはない、拒絶されたり死ぬことを避けることができる、苦痛のない力、屈辱のない栄光を手に入れられる》。

ペテロもそのように考えていたようです。『苦しみに遭うなんて言わないでください、捕まって渡されて殺されるなんて言わないでください、苦痛のない、屈辱のない栄光に進んでください』。それがペテロの人間的な考えでした。イエス様は誘惑を受けた時に「こうすればあなたは安全です、こうすればあなたは守られますよ、こうすればあなたはみんなから礼拝されますよ、こうすればあなたの命は助かりますよ」といった悪魔の誘惑を退けた時のように『下がれサタン』と言うのです。イエス様はペテロの人間的な考えに基づいた言葉を、悪魔の考えと同じだとして退けました。イエス様は反対にペテロを叱ります「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」。ペテロは「キリストであるならそんな苦しみになんて遭うことはないはずですよ」と言って、キリストであるということがどういうことなのかを自己判断してしまっています。自己判断すべきでない時の自己判断。キリストであるとはどういうことなのか自分で決めて定義しようとしています。「多くの苦しみに

遭うなんて言うてはいけません。」それに対してイエス様は「あなたは神のことを思っていない。人のことを思っている。」と言いました。

神様の思いは人の思いと違っています。イザヤ書の 55 章に神様が言われます「わたしの思いはあなたがたの思いと異なる。わたしの道はあなたがたの道より高い。わたしの思いはあなたがたの思いよりも高い。」と神様は言われました。神様の思いは私たちの思いよりも高いのです。でも私たちはそれを理解することができず、神のことを思うことができず、神のお心を思うことができず、人のことを考えてしまいま

す。そして人間的な考えをすると「苦痛なし、屈辱なし、困難なしだったら良いのにな、なのになんでそうじゃないのだろう」と思うのです。《屈辱なし、苦痛なし》というのはペテロや私たちの思い込みであり願望です。そしてキリストご自身がキリストは苦しみに遭うのだと語っているのに、「そんなことはない。キリストはそんな苦しみに遭うなんてことはないのだ」と自分で言うてしまうのです。

#### V. わたしのうしろに

イエス様はペテロを叱ります。「下がれ、サタン」という言葉はマルコの福音書 1 章にはありませんけれども、マタイの福音書でイエス様がサタンの誘惑を退けた時の言葉と似ています。「サタンよ 退け」。でもちょっと違うところがあります。この 33 節の「下がれ、サタン」というところにはこういう言葉が付いているのです。「わたしのうしろに退け、わたしのうしろに下がれ、サタンよ。」と言うのです。この“わたしのうしろに”という言葉はここで訳されてはいないのですけれども、“わたしのうしろに退け”と言っておられるのですね。そして 34 節でイエス様が「だれでもわたしに従って来なければ」と言っているところも、「もしだれかがわたしのうしろについてきたいと思うならば」というふうに“わたしのうしろについて来なさい”と、“わたしのうしろに”と言っておられるのです。“わたしのうしろに従ってくる”ということは“わたしに従ってくる”ということなので、だからあえて訳してないのだと思いますけれども、この 33 と 34 節両方に“わたしのうしろに”という言葉がありました。イエス様は「ペテロよ、あなたはわたしのうしろに下がりなさい」と言われたのです。

ペテロはこのとき、イエス様を叱り、イエス様を教え、イエス様に間違いを気づかせようとしています。そして「メシアとしての正しい道はこっちです」と言ってペテロがいかにも分かっているように教えようとしているわけです。つまり教師が生徒にするように、師が弟子にするように、ペテロがイエス様をいさめ叱り、あるいは指導しリードしようとしてしまっています。イエス様の“前に”ペテロは出てしまっている。そのペテロにイエス様は「わたしのうしろに下がりなさい」と言われたのです。

私たちも時に、自分が神のことを思っているのか、人のこと思っているのかわからなくなる時があるのではないのでしょうか。私もこの3月4月からずっと、6月7月、今に至るまで、新型コロナウイルスの感染が広がっていく中で何を考えて何を思っていたらどうか、と改めて振り返ります。何を考え何に基づいて決めたら良いのか、どう考えたらいいのか？今振り返るとあの頃は「苦しかったな」と言うか、悩んで悩み続けていたなと思います。何が実際に起こっていることなのか、一体どういう病気ですというウイルスでどこまで広がっているのか、かかったらどうなるのか、どこまでが本当の事実に基づいた情報で科学的なことなのか、またどこからが政治的な判断や思惑が入り込んだ言葉なのか、どれが信頼すべき情報なのだろうか、といろいろと考え悩みました。自分は神のことを思っていたのだろうか、それとも人のことを思っていたのだろうか、改めてこのイエス様の言葉を聞いて考えてみました。どれだけの人が今ウイルスにかかっているか、どんな症状になったか、人が助かるためにどうしたらいいか、人が行動をどう変えたらいいのか、色々と人間のことを考えていたと思います。もしかしたら神のことを思うことが出来なくなって、人のこと思うようになってしまっていたのかもしれない、とも思いました。

今日最後に歌う賛美は新聖歌 251 番の『主イエスのみそばに隠れ家あり』という歌を選びました。「イエス様のうしろに隠れなければならない」といいますか「主イエスのうしろにかくまっていたきたい」という思いになったのです。主イエスのうしろに退くとは《主に決めていただく》あるいは《主にリードしていただく》ということです。ペテロが間違えてしてしまったように、私たちの方がイエス様をリードするということでは逆になってしまいます。「主のみ思いを教えていただく、主の声から口から御声を聞く、お心を教えていただく」ということがなければなりません。そのようにして一步一步進んでいきたいと思えます。ペテロは「わたしのうしろに下がり」と言われました。

今この世界の状況を見ると、世界の国々がバラバラになってしまっている、分断されたように見えます。今こそ世界の国々が互いに協力し合わなければならないはずなのに、全然国と国が協力できない。それぞれの国が一生懸命やっている、それぞれの国がそれぞれのやり方でバラバラに何かしているという感じです。しかし一方で、この新型コロナウイルスのことによって同じ苦しみを与えられ世界の国々が同じ事に困惑したり悩んだりしている、そしてその中から同じ希望を見つけるように、今神様が地球上に住むこの星の民たちに語りかけ導こうとされているのかもしれない。イエス様は「多くの苦しみを通っていくのだ」と言われました。「そこからよみがえるのだ、多くの苦しみを通って命とよみがえりと栄光に至る」と予告されました。そして

その通りに歩いていかれた。そうですね。そしてイエス様はもう一度来られます。一度目に来られた時、この福音書で今読んでいる一度目にイエス様が地上に来られた時は、人間の期待とは違って高く上げられる王になるのではなくて、低くへりくだって死ぬために来られました。でもイエス様はもう一度来られます。その時は、二度目はそれとは違って治める方、さばく方として来られるのです。イエス様は既に来られた。そして多くの苦しみを通り、予告したとおりに捨てられ殺されてよみがえられました。そして天に昇って天に帰って行かれました。でももう一度来られます。その時が来ます。今私たちが生きているのはイエス様の最初の来臨と再臨との間に生きているのです。そのイエス様が、「わたしのうしろにいなさい」「わたしのうしろについて来なさい」と言われます。

## VI. 苦難が生むもの

キリストについて行くキリストの弟子も多くの苦しみを通るのか？という問題がここにあります。なぜキリストなのにそんな苦しみには遭わなければならないのかと思ったように、私たちもなぜ神を信じるのになお苦しみには遭わなければならないのだろうか、と思うことがあるかもしれません。『人の子は多くの苦しみを受け捨てられ殺されよみがえる。必ずそうなるのだ。よみがえらなければならない。』その“なければならない”というのは神様の定め“ねばならない”です。必ずそうなると神が定めておられるのです。キリストに従う人たちもその道を行くのでしょうか。多くの苦しみを通るのでしょうか。もしそうであるならば私たちがキリスト者として苦難を通ることは無意味ではないし、思いがけないことでもありません。確かにそれは通るべき道なのではないか、ということが出来ます。

キリスト者にとっての苦難とはどういうことか。ちょっとひとつのみ言葉を共に開いて読み、考えてみたいと思います。ローマ人への手紙の5章の3節と4節です。

「苦痛なし屈辱なしだったらいいのにな」って思うのですけど実際にはそうじゃない。それをどう考えたらよいか、パウロはここで書いています。「それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。」ここに最初に苦難が出てきます。苦難が生み出すものがあるのです。苦難は何を生むか、苦難は忍耐を生み出すというのです。忍耐という言葉は“その下に留まる”とか“そこに留まり続ける、住み続ける”というような意味の言葉です。下に留まるということなのですね。苦難があるそのもとに留まっている時に、そこで人間が磨かれ削られ成長します。品性が練られていく、忍耐が練られた品性を生み出すというのです。人格が練り上げられていくというのです。そしてそれが何を生み出すか。それが希望を生み出すのです。私たちは希望を待ち望んでいま

す。ここから先、将来どこに行ったらいいのか、どこを目指したらいいのか、今それがなかなか見えないので苦しい思いがします。3ヶ月後、半年後、一年後がどうなっているか、5年後10年後の未来将来はどうなるのか思い描くことが難しくなっているので苦しくなります。希望を待ち望んで苦しむのです。

でも何が希望を生むのか、希望はどこから生まれるか、ここにはっきり書いてあります。苦難が来る時にその下にとどまること、そこで成長する・成熟すること、そこから希望が生まれると言うのです。苦しみは無意味ではありません。そこを歩いて行くべきところがあります。そこを歩いて私たちが身につけるべきものがある、成長できる、成熟できるというのです。そして成長すべき自分、なるべき自分がある、ということです。神様がこの世界と私達の未来に何を備えてくださるのか、それは今見えないように思います。想像がつかないように思います。「神が備えてくださるものというのは人の心に思い浮かんだことのないものだ」と第1コリント2章9節にはあります。これから私たちはどんな道を通して、世界と日本の民は、また教会の神の民はどこに導かれて行くのでしょうか。神が備えてくださるものが未来に待っています。その命とよみがえり、復活と回復の世界に行くためには、まだ苦しみを通らなければなりません。逆に言えば、お互いが今苦しみを通っているとするならば、通るべきところを歩いている、ということがいえます。

苦しみの意味を教えてください。そこで成長し、深化、深められる成長をさせてください。目を向けるべき方から目を離さずに、主をもっと知ることができるよう、主の近くにいらさせてください。「わたしのうしろに退きなさい」とイエス様が言われます。「自分は出すぎているのじゃないだろうか」と思う時に、出なくて良い時は出ないように気をつけて主イエスのうしろに引きましょう。そして神のことを思うことを教えてください、と主にお願いしたいと思います。ペテロも言われました。叱られました。私たちも時々イエス様に叱られます。「あなたは神のことを思わずに人のことを思っているではないか」と。神のことを思うということを教えてくださいたいと思います。

例えば毎週祈る、今日も祈った主の祈り。私たちは何を祈っているのでしょうか。主の祈りは前半と後半に分かれていますけれども、まず前半で【神の御名、神の国、神様あなたの御心が】と神のことを思う、神様に焦点をまず当てるようにと教えられています。まず神のことを思い、それからその後に【我らの日用の糧、我らの罪、我らを試みに】と祈るようと、イエス様が教えてくださいました。まず神のことを思い、それから人のことを思いましょう。そして「わたしのうしろに退きなさい」とイエス様が言われたように、分をわきまえてなすべきことを黙ってしていきましょう。

なすべきことをしたまでです、と言えは良いのです。そしてなお苦しいことがあったとしても、苦しみを通ったとしても、その先に新しい道があり新しい光があり新しい世界がある、そしてその先に希望があるということを信じて忍耐しつつ信頼しつつ進んでいきましょう。

私たちは今悩んだり苦しんだり迷ったり、あるいは恐れたりしています。それぞれの生活の中に、健康状態もあるでしょうし、家族の状況もあるでしょうし、思わぬ病気とか経済的な状況、仕事のことなどなど、いろんなことがあります。その中で困難や病気やウイルスを恐れすぎないで、この状況のもとに留まり、そこで主を見上げ信頼することを忘れないで、成長と成熟の道を進みましょう。その先に希望が生み出されると信じて、今通っている困難、今通っている苦しみが私を練って希望を生み出させるのだと信じて、その道をお互いに進みたいと思います。イエス様を見続け、イエス様に手を取っていただき進んで行きましょう。イエス様の前に出てしまっていないか、人の前に出すぎてないか、点検しましょう。そしてイエス様のうしろに戻るのです。「わたしのうしろに退きなさい」。イエス様のうしろにもう1回戻って再出発をします。私たちの先頭に行くのは主イエス様だと思い起こし、それを心に刻んで再出発をしましょう。

旧約聖書のイザヤ書 61 章に「悲しみや心の傷があるところに主の栄光が現される」とあります。それらの悲しみや傷がなければ現わされない栄光がある。そのように苦難困難がなければ希望が生み出される場所まで行くことができない、ということです。神様が導いておられます。私たちが今困難を通していくように、そしてそこを通して命・よみがえり・栄光へと進んでいくように導いておられます。もう一度今苦しいことを主にお話しし、その中で私に忍耐を与え私を練ってくださるよう祈りましょう。そしてその中から希望を生み出してくださいと祈りましょう。共にお祈りをささげたいと思います。しばらく黙祷のうちにそれぞれが祈りましょう。

## VII. 結びの祈り

お祈りをささげます。イエス様あなたが多くの苦しみを通られるということを予告され、その通りに歩まれました。今私たちもいろいろな悩み苦しみ迷いの中にあります。神様、助け導いてください。この道を通して命とよみがえりと栄光に至ることができますように、どうぞ導いてください。イエス様あなたのうしろに下がり、あなたのうしろに隠れ、あなたの背中を見て歩いていくことができますように。神様の心を思うことを教えてくださいますように。主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。